

短歌春秋

137号

目次 ● 2016年1月

秀歌を読もう

黒木三千代

特集

家族の歌

伴侶への想い

永田 淳

「家族の歌」応募作品

5

連載

万葉の紐を解く④

上野 誠

18

短歌の技法 基本のき 最終回

伊藤一彦

20

リレーエッセイ 媼の「お接待」

玉井清弘

22

受講者作品

秀歌鑑賞

武下奈々子

24

誌上添削(入門・実作)

紺野万里・五十嵐順子

26

今月の表紙画



「蘭王」

池田 松蓮

NHK 学園
俳画講座専任講師

謹んで新春のご挨拶を申し上げます。
申(猿)は「桃太郎」などの昔話にも登場します。「見ざる聞かざる言わざる」などはお馴染みの画題です。京都高山寺の「鳥獣戯画」には一六四匹の猿が描かれているそうです。
元旦の小公園の群雀

ご案内

NHK 学園 学習の旅のご案内

40

生涯学習フェスティバル短歌大会のご案内

41

● 選者・講師の新歌集

黒木三千代

30

● 受講者のみなさまへ

32

● あなたの声

33

● 質問箱

中川佐和子

35

● 受講者の歌集

牛山ゆう子

36

● 歌だより

小黑世茂

37

● NHK 短歌

38

● 「学習の旅」の報告

39

受講者のうた……裏表紙

伴侶への想い

「私たち歌人はもしかすると、よい挽歌を作るために言葉を研ぎ、感覚を澄ましながら日々の歌を作っているのではないだろうか」
こんなことを私は時々思うことがあります。

私のもっているカルチャーセンターの短歌教室にも、親や連れ合いを亡くした時に歌が自然と出てきたことがきっかけとなり短歌を作り始めた、といった方が時折入って来られます。しかし当たり前のことですが、ある日突然短歌を作り始めても、最初からいい歌が出来るわけがありません。誰かに思いを伝えたいから、多くの人に読んでもらいたいから、あるいは賞をとりたいたいから、作歌の動機はそれぞれにあるでしょうが、自分の最も身近な人を亡くしたときに情を叙する表現型を持っているということは、何物にも代えがたく強いことだと思っております。

ここ五年ほどの間に伴侶を亡くした男性歌人の歌が多く発表されています。



永田 淳

伴侶を亡くした男性歌人の歌として最初に思い浮かべるのは、土屋文明の

終りなき時に入らむに東の間の前後あしごありや有りてかなしむ

『青南後集』

でしょうか。いずれは二人とも「終りなき時に入」る、つまり死ぬのだけれど、二人同時には死なないので、「東の間」の「前後」がある、その少しの時間が悲しいのだ、歌はそう言っています。この時文明九一歳。しかし文明はこの後じつに一〇年も生き続けます。さて、最近出た小池光さんの最新歌集『思川の岸辺』は、奥さんの和子さんをガンで亡くされた前後の歌が収められていて胸に迫ります。

肩のちから抜いて大きく息を吐け そら、ひぐらしのこゑが聞
こえる

上の句は病が篤くなった妻への呼びかけでしょう、直截な言葉遣い
が必死さをよく伝えています。少し小康を取り戻されたのでしょうか、
それとも蝸の声を言うことで和子さんの気を紛らそうとしたの
でしょうか、下の句は穏やかな語り口となっています。ここで蝸が
出てきますから、この一首が作られたのは夏だということが分か
ります。歌集『思川の岸辺』ではこの一首を含む一連「黒日傘の人」
に続いて「伎芸天」の一連となりますが、その一首目は

わが妻のどこにもあらぬこれの世をただよぶごとく自転車を漕ぐ
となっていてすでに奥さんは亡くなっておられます。そしてこの一
連には「亡くなりしことを伝えて妻に來し賀状に返事われは書きた
り」とありますから、「伎芸天」一連は明らかにお正月前後の歌とい
うことになります。蝸から一気に年賀状まで飛んでいることになり、
この間の歌はありません。

事実、本人が編集人をされていた「短歌人」でもこの頃、小池さ
んの歌が見られず、もしかして小池さんは歌を辞めてしまうのでは
ないか、と私たちは心配したものでした。

しかしこの後、小池さんは溢れるように亡き妻への挽歌を作りま
す。ごく一部を抄出してみましよう。

正座して鏡のまへに居りしきみ声をかければふりむくものを
猫を洗ふはきみ専一の仕事にてけふわれははじめて猫を洗ひつ
十五歳夏のはじめの出会いにて四十八年のちのわかれぞ
そこに出てゐるごはんを食べよといふこゑとはに聞かれず聞
かれずなりぬ

裕子さんの死をつひに告げ得ざるまま秋に逝きたりわが妻和子
小池さんは自ら作るこれら数々の挽歌に慰められもし、励ましも
されたのだらうと私は想像するのです。

引用四首目は二十年前に出た小池さんの第四歌集『草の庭』の
「そこに出てゐるごはんをたべよといふこゑすゆふべの闇のふかき
奥より」を踏まえています。当時、この声の主が母親なのか妻なの
かといったことが話題になったと聞きますが、挽歌として種明かし
がされているわけです。下の句の「聞かれず」のたたみかけが、レ
トリックを超えた悲痛な思いとして表現されています。

このリフレイン、咳くように口をついて出た言葉を書き留めたの
か、あるいは計算し尽くして詠われたのか、今の私にはわかりませ
ん。おそらくその両方であったのでしょう。ただ、こんな単純な技
法が読者の胸中深くに染みこむのは、短歌の力であり、長年歌を作
り続けた作者の力量でもあると思うのです。

最後に引いた歌の「裕子さん」は私の母、河野裕子です。和子さ
んが亡くなったのは、母が亡くなって二ヶ月後、ちょうど母のお別
れ会の日だったと思います。その夫、永田和宏にも多くの挽歌があ
ります。

歌は遣り歌に私はなくだらういつか来る日のいつかを怖る

永田和宏『夏・二〇一〇』

「ゆうこー」つと呼べば小さき息ひとつ吸ひ込みぬ最後にわがための息を

夕食の食べ方こまごまメモをして先に寝ますとありしあの頃偶然に出逢つてのちの四十年もう偶然とは言へないだろう

一首目は母が亡くなる前、二首目は亡くなる間際の歌です。三、四首目は小池さんの歌とよく似たモチーフとなっており、どちらにも悲しい歌です。

こうして在りし日の物事を思い浮かべて一首にすることは、ある意味ではカタストロフ的な、しかしそれ以上に自己救済的な意味合いを持つものでしょう。「その時」にどれだけすぐれた歌が残せるのか、私が冒頭に申し上げたかったのはこういったことです。

もう一人、奥さんを亡くされた高野公彦さんの歌を紹介しておきましょう。私たち読者が高野さんの奥さんが亡くなられたのを初めて知ったのは、おそらく「歌壇」2014年9月号だったと思います。その一連「玄水」二十首も九首目まではごく普通の歌が並べられていました。しかし「六月二十三日、脾臓ガンにて妻死す。」と詞書きされて、十首目以降、突如次のような挽歌が並びます。

妻亡き夜みづから茹でてやはらかきモロッコいんげん食へば悲しも

眺めては夢かと思ふ思ひきや妻の骨箱が部屋に在ること
むくげの白、綿雲の白 この夏の時空じくうに浮かぶ妻の骨の白
母の死と父の死、妻の死がありてわが生涯に残る死一つ

一首目は奥さんが亡くなられたその日でしょうか、生きている者はやはり食わねばならない、その切実とモロッコいんげんが効いています。二首目は三句目の「思ひきや」がポイントでしょう。かつてこんな日が来ると思っただろうか、いや思わなかった、といった反語となっています。

四首目は、親しい者たちが亡くなっていき、あと一つ残っているのは自らの死だけだ、と言っています。この一首を読んだとき、私は即座に「浄められし子のなきがらににんげんの男おとこのしるしあり声なく見たり」(「水木」)の一首を思い浮かべました。死産だった子を詠った一首です。引用四首目には音数の制約上盛り込めなかったもの、きっと高野さんの脳裡にはこの産まれ得なかった男の子のことも過ぎただらうと私は想像するのです。そして私はこうしたことを空想できることを、誠に不謹慎ながら、よろこぶのです。それは歌を作り、読んでいるからこそ出来る、作者の懐深くに潜り込んでいく行為なのだから。